

1 主題名 道を切り拓く（主として 1－（2）立志，不撓不屈）

2 資料名 志を立てる～松下幸之助～（自作資料）

3 授業構成

（1）教材に対する反省と新しい提案

従来のいわゆるスタンダードな道徳の授業における資料分析と教材研究としては、

- ① 学習で扱う資料を読み、登場する「人間」とその行為のなかにある道徳的問題の所在を明らかにする。
- ② 場面に分ける。
- ③ 中心となる場面を考える。（主人公の道徳的な変化が現れており、子どもが一読して読み取れないような心の動きをとらえさせたい部分）
- ④ 中心となる場面で子どもたちにどのような発問（中心発問）をするかを考える。
- ⑤ 中心発問によって、子どもたちがどのような反応を返してくるかを予想する。
- ⑥ 中心発問と予想される児童の反応が決まったら、その前後の場面について必要な発問（補助発問）を考え、子どもたちの反応を予想する。

というものであろうと考える。

確かに既存の資料をもとに、「学習指導要領におけるいわゆる価値項目を効率よく指導する」ためには、このような資料分析と教材研究の進め方が効果的なものかもしれない。多くの出版社の副読本のなかにある伝記資料を見てみると、ひとつの問題点を見いだすことができる。それは、確かに人物を扱った資料ではあるが、特定のエピソードが抜粋された文章であり、人物の個性や生き様といった伝記資料本来のもつ「人の生き方に学ぶ」視点が欠如しているものが多いということである。これは、先にも述べた、「学習指導要領におけるいわゆる価値項目を効率よく指導する」ためには、その価値項目に適したエピソードのみを取り上げて指導した方が都合がよいからだと考えられる。実際にこういった資料を用いて授業してみればわかるが、その人物の性格やものの考え方などを何も知らないで授業を進めると、児童は主人公の生き方に関係なく、価値に関する知的理解の域から脱することができない平板な話し合いに終始してしまう。

そこで、本時は、「伝記資料とはどうあるべきか」ということと、「伝記資料を使って学習を進めるための教材研究はいかにあるべきか」について考えた。前述のような資料では、本来学ぶべきその人物の生き方が見えてこない。そして、そのような資料では、人の生き方に対する感動や憧れが持たず、自らの内面にモデル像を構築することもできないことが問題なのだと考える。この問題意識を出発点として、「人の顔の見える伝記資料」を用いることに留意した。

本資料は、松下幸之助が電気事業に身を投じてから独立して会社を興すまでの過程をまとめた話である。電気で走る路面電車に感動し、電気の時代の到来を感じた松下幸之助が「大阪電灯」という会社に入社し、ひたむきに仕事に打ち込む。しかし、社内で出世するほど、自分のしている仕事と入社したころの電気をかけようとする思いとのちがいを感じ、独立して自分の会社を興すという資料である。

本時は、主として内容項目の1－（2）「立志・不撓不屈」をねらいとしている。特にこの資料では、自らの進む道を定め、自分の思いに対して前向きに進んでいこうとする強い意志と実行力を児童に感得させることが重要であると考えられる。松下幸之助の生き方にふれ、感じ、考え、自らを振り返ったときに、自分もかくありたしと思えるような道徳的心情を育むことができるよう活動を深めていきたい。

また、松下幸之助の不撓不屈の精神を支えていたものとして、自己を見つめ、向上心を持って自分を伸ばすこと（個性伸長）や、仲間たちとともに協力して仕事をしたいという思い（信頼・協力）な

どにこだわりをもって考える児童もいると予想される。また、自分の健康や家族への思い（家族愛）から、せつかく出世した会社を辞めるといった判断への迷いを感じる児童もあるであろう。人の生き方を考えるときに、行為を支える価値観を多様な視点から見つめていくことが重要であると考えられる。たとえそれが資料の主人公の弱さや迷いに関する部分であったとしても、児童一人ひとりが人間の生き方についてこだわりをもって考えていくことで、児童が自分の生き方を主体的に見つめ直し、考えを深めさせることができるようになる。

確かに、松下幸之助のような生き方を児童が真似して実行することは、現段階では難しいであろう。しかし、だからこそ、彼の生き方にふれ、感じ、考えることが重要であると考えられる。そして、自らを振り返ったときに、自分もかくありたいと思えるような道徳的心情を育むことができるよう活動を深めていきたい。

（２）道徳の時間の学習において、児童に期待する学び方

道徳の時間の学習を考えたとき、学習する資料のよさ、おもしろさはもちろんであるが、「資料との対話」「仲間との対話」「自分との対話」によって、道徳の時間における学びを楽しもうとする姿を求めていきたい。

単に自分が知っていることを言い合っている状況は対話とは言わない。未知なるものと出会い、自分の知識がその対象の表層でしかないということを認識することが対話のスタートと考える。また、「会話」は“単なる情報の交換”であり、「対話」は、“情報を受け渡ししたときに、互いの変容をともなうような（変容が期待できるような）活動”と捉える。この場合の変容とは、「体験を通して新たに芽生えた感情」や「友達と話し合っただけよりよい解決方法を見いだす活動」、「今までの自分を振り返り、自分がどうありたいかを自問すること」など多岐にわたる。

授業の中では、「対話」は主に以下のような場面で展開される。

- ① 未知なるものとかかわって、気づく、変わる。
(価値あるものとの出会い。資料との対話)
- ② 自らのなかで自問自答し、言語化することで考えを明確にする。
(課題に対して自力で解決に取り組む。自己内対話)
- ③ 応答的な関係性のなかで、自分の考えと他者の考えとを交流し、集団として高まっていく。
(相手意識のある、他者の変容を促すような話し合い活動。他者との対話)

対話は他者とのかかわりにおいて自分を深く見つめ、他者の考えを肯定的もしくは批判的に受け入れつつ、自らの考えに生かすことが重要である。これがなければ決して交わることのない個人の主張に終始しただけに終わる。

本学級の児童に必要なことは、「他者とのかかわりを通して個人の力が伸び、集団としても高まること」であると考えられる。質の高い対話によって構成された授業により、個人及び集団としての思考力、判断力、表現力等が育成されると期待する。

（３）本時に向けての教材研究

これまでの実践においても、伝記資料を用いるにあたり、事前に伝記を読ませたり、調べ学習をさせたりする取り組みを行っていた。しかし、事前の学習への取り組みが児童個々によって差があり、結果として学習が全体のものになり得ていない様子を感じるがあった。

そこで、事前学習の取り組みを児童個人にゆだねる部分と、全体で進めていく部分とに分けた。児童個人では、以前と同様に野口英世の伝記を読んだり、自分で調べ学習をしたりすることを奨励した。そして、全体には道徳ファイルを持たせて教師が配布するプリントを読んで感想を書く活動を行った。また、教室内に常に数冊の松下幸之助の伝記を置き、児童がいつでも読める状況をつくった。

本時では、大阪電灯での松下幸之助のエピソードについて初発の感想を出し合う活動を通して、電気の将来性を感じて電気事業で自分の志を立てて進んでいこうとする彼の姿に共感させたい。そのなかで、児童は、「せつかく出世して給料が高くて楽な仕事につくことができたのに、なぜ、会社を辞めることを決めたのか」という部分に話し合いの中心を置くと考えられる。この問いに対して、松下幸之助の強い意志を支えているものは何かという視点を持たせながら考えていく。そうすることで、

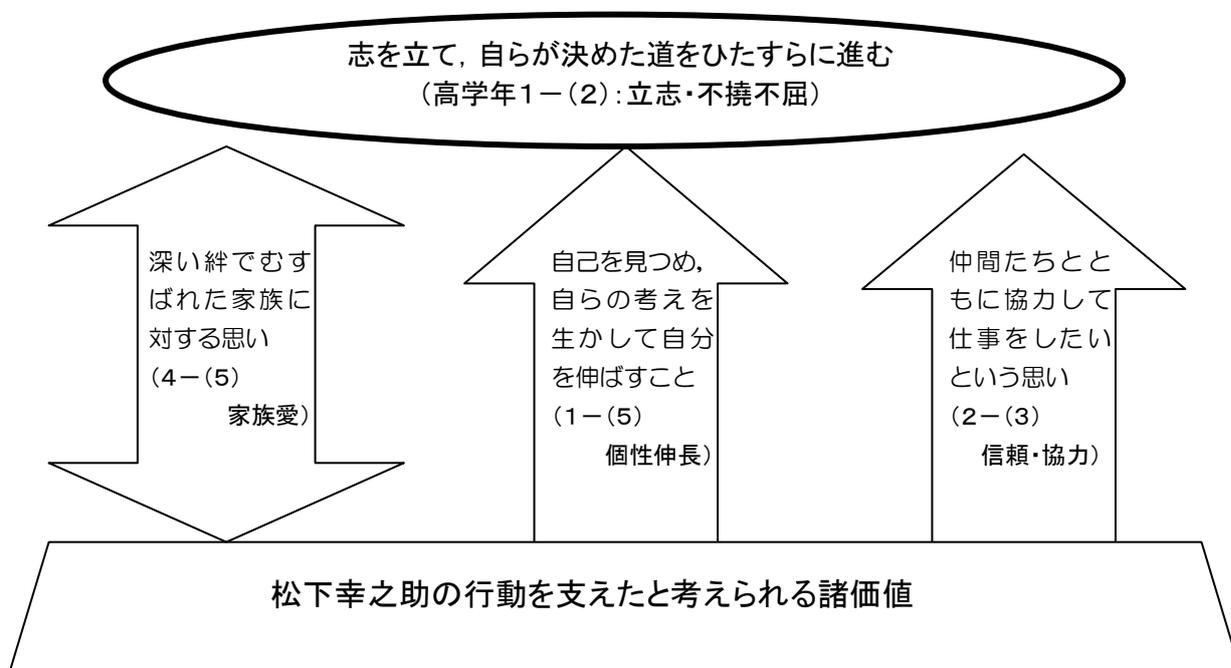
児童は今まで学んできた松下幸之助の生き様を振り返りながら、仲間とともに仕事を成し遂げた充実感や喜び、電気の道に進むことで自分の力を仕事に生かすことができたという思い、一方で仕事を辞めれば、今まで家族のために働いてきたことが無駄になるという幸之助の迷いなど、多面的な価値の観点から話し合いを進めることができる。そして、迷いのなかでも自らの立てた志をとおすことを選んだ「松下幸之助の立志の精神」について、それぞれの児童なりの視点で捉えなおしができると考える。さらに、話し合い活動の後半では、「自分はこうありたい」という立志の精神を自らの生活に返して具体的に考えさせるようにしたい。そうすることで、本時で学んだ松下幸之助の生き方を少しでも自分の生き方に返していくことができると考える。

4 本時の学習

(1) 本時の目標

松下幸之助の生き方に迫る話し合い活動を通して、志をもって自分の生きる道をひたすらに進んだ姿に共感するとともに、彼を支えていた思いについて自らの視点をもって考えることができる。

(2) 本時の学習における価値の構造



(3) 準備

資料「志を立てる～松下幸之助～」、提示用写真、ワークシート

(4) 本時の展開

(◇：全体への支援 ◆：個への支援 ○：教師の意図)

学習過程	主な発問と児童の反応	教師の支援・意図
1, 感想の分析	○資料「志を立てる～松下幸之助～」を読んで各自が感想をもつ。	○資料の内容を正しく共感的に把握させる。
2, 問題の焦点化・共通化	○資料の主人公の生き方に対して、どんな感想をもったか。 ・幼いころからひとりで働きはじめた幸之助のたくましさ ・仕事に打ち込む幸之助のまじめさ ・楽な仕事に不満を持つ幸之助への疑問	○主人公である松下幸之助の評価の高さについて紹介する。 ○家族のために働きに出たことや楽な仕事に満足しない幸之助の姿に問題意識をもつ児童が多いと考えられるので、その部分に焦点化する。
松下幸之助の生き方を支えた思いについて、話し合い活動を通して迫ってみよう。		

<p>3, 問題の明確化・追究</p>	<p>◎なぜ、幸之助は「楽で給料が高い」仕事に満足できなかったのだろう。彼を支えていたのはどんな思いだったのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仲間たちは一生懸命働いているのに、自分は楽な仕事をしているのがいやだという思い。(協力, 不撓不屈) ・妻は喜んでくれるかもしれないが、自分のやりたい仕事ができないことへの不満(家族愛, 個性伸長) ・自分には改良ソケットという電気製品のアイデアがあるのだから、楽な仕事で満足しては自分が成長しないという思い。(個性伸長) ・電気の仕事にがんばって働くことが楽しいのだから、仕事が楽なことは彼にとってうれしくない。(勤労) ・電気の道を進もうという気持ちでがんばってきたし、そのためのアイデアもあるのだから、あえて楽な道は進まないという思い。(立志) 	<p>○幸之助の仕事に対する思いを話し合い活動を通して感じ取ることができるようにする。</p> <p>○「自分の決めた道をひたすらに進みたい」という彼の思いを支えていたものが、自主・自律, 信頼・協力, 勤労など様々な諸価値であることについて、児童の話し合いをもとに迫らせたい。</p> <p>◆話し合いのなかで簡単に類型化し、児童一人ひとりが、自分が深く考えたい価値観について語るができるようになる。</p> <p>◇自分の考えだけでなく、友達の意見から感じることも話し合いが広げられるようにする。</p>
<p>4, 価値の主体化</p>	<p>○今日の学習で出てきた「松下幸之助を支えていた思い」のなかで、自分が大切にしていきたいことは何だろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・係の仕事をするときに、責任を持ってやり抜くような自分でいたい。自分がきちんと仕事をするのがみんなのためになるから。 ・学習中にはっきりと自分の意見を言えるような自分になりたい。自分の意見を伝えることが、自分の力を伸ばすことになるから。 ・自分が決めたことには責任をもってやり抜くことを、勉強やスポーツに取り入れていきたい。 ・創意工夫してやり抜くことを、委員会活動の中に取り入れてみたい。 	<p>○幸之助の生き方から学んだ「立志」の精神について自己の生き方に生かせることを考えさせる。</p> <p>○幸之助の生き方を支えたものを自らの視点とし、自分の生活のなかの具体的な場面に重ねて考えられるようにする。</p> <p>◇ワークシートに記入し、それぞれの思いを語るなかでさらに自己の生き方について考えを深められるようにする。</p> <p>◇児童がより多様な考え方を知り自分の価値観との違いを明らかにするために、挙手による指名だけでなく、意図的指名も取り入れる。</p>
<p>5, 本時で学んだことの確認</p>		<p>○教師の説話を聞き、学習のまとめとする。</p>

(参考文献等)

- ・ 「松下幸之助 光と夢をもとめつづけた90年」岡本文良著 PHP研究所
- ・ 「1冊でわかる松下幸之助」PHP総合研究所編著
- ・ 「松下幸之助が直接語りかける成功のために大切なこと」PHP総合研究所編著
- ・ 「松下幸之助青春伝」なかまる修一画 集英社
- ・ 「世界の経営者松下幸之助」中村寿雄著 文研出版